# 別海町郷土資料館だより

No.105　2008年4月号

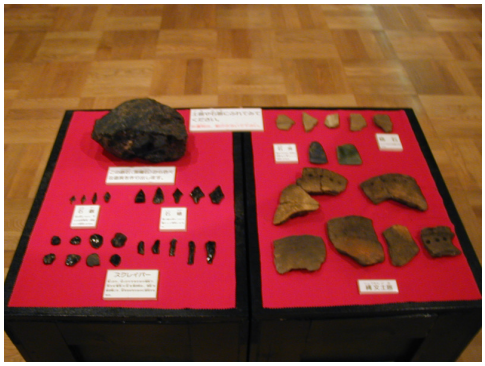

## 郷土資料館常設展示

# 考古コーナーをリニューアル！

この度、郷土資料館の常設展示「考古コーナー」をリニューアルしました。別海町の古代の様子を発掘調査資料や解説パネルにより、わかりやすく、見やすく、さらに、土器や石器にふれられるコーナーも新設しましたので、ぜひご覧下さい。

縄文人骨

リニューアルの様子



土器や石器にふれるコーナー

## ふるさと講座・歴史系のお知らせ　別海ミステリーツアー第1弾

# 「古代竪穴住居跡と幻の町キラク」

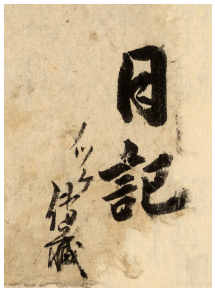
野付半島内に残る無数の竪穴住居跡と明治の頃より伝わる幻の町キラク（野付通行屋・番屋跡遺跡）を巡ります。みなさんのご参加お待ちしております。

■日　時　5月11日（日）
　　午前9時30分～12時30分
■場　所　野付半島
　　（集合場所－野付半島ネイチャーセンター）
■定　員　20名（小学生以上）
■その他　①長靴持参　②約８キロ程度歩きます。
　　※詳しくは、郷土資料館までご連絡ください。

「加賀家文書」の調査研究から～その26

# 史料「日記 ノツケ 伝蔵」

～根室場所のアイヌを天然痘から救った貴重な記録からⅢ～




## 箱館から子モロ（根室）へ向かう

本州から蝦夷地へ渡り漁場などで働く人々や妻子を伴って越年する人たちも増えてきました。そこで、松前藩は寛政 12 年(1800)に「～通辞・番人・稼ぎ方、働き相成候者共、疱瘡不済者は決して蝦夷地に留置申間敷候。(以下略)」(蝦夷地へ入る者は必ず種痘を受けること)という「お触」を出して取り締っていたようです。しかし、その後も天塩・宗谷でアイヌ 509 人、利尻・礼文でも大流行し大部分が死亡しました。さらに、石狩でも大流行し多数が死亡しました。天保年間(1830～1844)、厚岸では、疱瘡が流行ったりしてアイヌの半分近くが死亡しました。また、静内・三石では 24 人羅患し、17 人が病没しました。安政年間(1854～1860)に入っても、蝦夷地の全域で流行っていました。

### 1．箱館を発ち、東蝦夷地へ一前途多難な門出

東蝦夷地へ出発の前日に、門人の井上元長に先触状を持たせて山越内(森町)まで先発させました。翌日（安政 4 年 6 月 20 日過ぎか？）門人の西村・秋山、種痘児 2 人を連れて鷲ノ木(森町)に着きました。そこへ、先発させておいた井上元長が戻ってきて「種痘医師が来たという噂を聞いて、恐れをなして山中へ逃げ込み、大騒動している。」また、詰合の役人も早馬で駆け付け「蝦夷地に入ることを暫く待っていただきたい。」と言うので、3 日間留まることにしました。この間、金子を与えたりして種痘に来るように説得しましたが、山越内の支配人が種痘に反対し、山へ逃していたことなどによって、種痘へ理解を得ることができなく仕方なく、山越内での種痘をあきらめ、室蘭までいくことにしました。

### 2．室蘭への道

船だと一日の距離(7 里×3.75 キロ＝20 キロ余)ですが、陸路(徒歩・馬・駕籠)だと、山越内・長万部・礼文華(豊浦町)・振内(平取町)まで 4 泊 5 日もかかります。しかも、大難所であります。「立斉年表」にも記されていないので、正確にはわかりませんが、箱館から鷲ノ木まで 2 日、同所に 3 日間滞在したことを考慮すると、徒歩だと、室蘭到着までに 10 日間を要したと考えられ、果たして徒歩だったのか、船だったのかを判断するには史料不足であります。

### 3．室蘭での接種

室蘭では種切れを恐れて、先ず同心の子に種継ぎをさせ、次いで野馬掛りの子どもにも接種しました。当時、室蘭には 236 人のアイヌが住んでいましたが、やはり、支配人の無理解から、山中に逃げているアイヌを説得し、漸く 14 人に接種しました。

### 4．門人たちを勇払へ

立斉と秋山は室蘭で、西村と井上を先発させ、勇払で種痘を急ぐことにしました。勇払の支配人の協力を得て、すぐに 30 人程に接種をすることができ、さらに、「南部仙台陣屋から出張り、『不伏の者は召取る。明き小屋は焼き払う。』などと言い聞かせました。昼夜で 200 人或いは 300 人も植えた日もあった。」(「立斉年表」) により。

### 5．道東へ向かう

6 月 30 日室蘭を出て、国後へ向かいました。門人の三人は「西地へは文石、元長は勇払(苫小牧市)から様似辺まで、玄譚は振内から有珠（伊達市）辺り」まで種痘に向かわせました。(「立斉年表」)

7 月 4 日曇、幌泉(えりも町)出立、沙留（えりも町）着、「(襟裳岬の難所）を馬で越した。其の難渋言葉では言い表せない。(山道に入り）夜に入り、方向も判らない。馬に頼み、天に任せ、馬上で経文を声高く唱え、夜 10 時頃十勝の会所に着く。」(「立斉年表」)

### 6．子モロ（根室）会所に着く

「7 月 15 日、晴夜にて子モロにて月を見る。都下妻子を思ふ。」と「立斉年表」に記されていますが、十勝の後、釧路・厚岸、ここからは、別寒辺牛川を舟で 8 キロばかり遡り、陸路厚別(根室市)への道を 2 日程もかけて歩き、厚別からは、舟で根室へ向かったのであろうと思われます。新暦では、9 月 3 日にあたります。すでに秋の気配だったはずで、江戸を出てすでに 2 か月半も経っていました。門弟たちとも別れ、痘苗児とその父母と荷物を運ぶ男との旅だったようです。

室蘭を出て、半月程で根室に着いています。この間の種継ぎは、どこでしたのかなどのことは未だ明らかにしていませんが、半ば驚異的なことで、何が立斉を此処まで動かしたのでしょうか。

●参考・引用文献　「桑田立斎先生」二宮陸雄　1998　桑田立斎「立斉年表」二宮陸雄・秋葉實　1999

別海町郷土資料館だより No.１０５
発行日　平成２０年４月１日
発行所　別海町郷土資料館
別海町別海宮舞町 30 番地
電話　0153－75-0802（FAX 兼）
e-mail　kyoudo@betsukai.jp

編集後記

今まで町内全戸配布していました「郷土資料館だより」ですが、諸般の事情により、「広報べつかい版」この「当館配布及びホームページ配信版」となりました。2 つの媒体により、多くの情報を発信・提供していきたいと考えていますので、ご愛読ください。（石渡）